
哀れな羊たち

やよや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀れな羊たち

【Nコード】

N8938Z

【作者名】

やよや

【あらすじ】

練習作品？

更新は超不定期です。

舞台は異世界。

魔法が存在し、争いがまだ存在する世界。

そこに生きる一人の少年のお話。

まだまだ初心者ですので、よろしくお願いします。

プロローグ

そこは灼熱の地獄だった。

体の内側から焼けるようなひどい熱。辺り一面には、その元凶でもある赤い炎が立ち上っていた。

炎は再生と破壊を司る。

荒れ狂う炎はまるで海のようにどこまでも広がっている。

空は今にも泣き出してしまいそうなほどに、黒く、淀んでいた。

「……………あつ」

その地獄の中に何かがいた。

小さな呻き声と共に、地を這う音が微かに響く。

燃える世界の中にいたのは一人の少年だった。

齢は十代後半だろう。十七か十八か、恐らくそのあたり。

彼の金髪は熱で縮れ、纏う服は焼け焦げ、ところどころは溶けてさえいる。原型はもはや留めていない。

その隙間から覗く体には痛々しい傷があり、いたるところから血がにじみでていた。

「……………くっ……………」

声にならない声が、その乾ききった唇から零れ落ちた。

一度呼吸をすれば肺は焼け、熱された地面は彼の剥き出しになった肌を焦す。

常人なら間違はなく命を絶たされる場所。

そんな場所にもかかわらず、少年は動きを止めることはなかった。終わりのない地獄。そこから逃げ出すために、彼は必死に地を這いずり回っていた。

もう頭は働いていない。

生きるために。ただその一心だけで、彼はたった一人、この炎の海をさまよっていた。

背中に走る激痛に少年の顔が歪む。

「こんなところに……」

ガサリと。唐突に乾いた地を踏みしめる音が目の前から聞こえた。焦点の定まらない瞳のまま、彼は思わずゆっくりと顔を上げる。

「悪い。こんなことになってしまった」

目の前にいたのは一人の人間。

そして聞こえてきたのは女の声だった。

凜とした、けれどどこか不安を帯びているような、そんな不思議な声。

黒い外套を羽織り、フードを目深までかぶっているので顔までは分からない。

しかし、その声と外套の上からでも分かる豊艶な体つきから、女性だということは一目瞭然だった。

「……………」

「無理をして喋るな」

少年の紡ぐ音のない声。

その様子に一瞬だけフードの下で顔をしかめた女性は、自分の手を静かに外套の中に入れる。

「これからは私が守る、だから」

すると、彼女が黒衣の中から手にしたのは一振りの剣だった。

白銀の、汚れない刃。

鏡のように磨かれた刀身には蠢く炎が映されている。

少年はその光景をただぼんやりと見つめ、そして自分の姿を、その鏡のような刃の中に見つけた。

「すまない」

朱色の唇から再度発せられた謝罪の言葉。

それが合図であったかのように、彼女の剣を持つ腕が勢いよく振り下ろされた。

一切の容赦もなく。一切の抵抗もなく。

無抵抗な少年の首に狙いを定めて。

「……………」

ポツリと、少年は言葉を発しようとする。
けれどそれはもはや何の意味もなさない。
仰ぎ見たまま呟いたその言葉は、炎の海に飲まれた。

そして。

空から一粒の涙が零れ落ちた。

これは夢。

とある少年が幼い頃から見続ける夢。

成人となった今でも現れる、救いのない幻だった。

雲一つない青空の下。

溢れんばかりの人が騒がしく行き交いする道のど真ん中で、一人の少年の視界が捉えたのは遙か先にある巨大な古城だった。

趣を残す城。外壁のところどころは欠け落ち、黒ずんでいる箇所があるにも関わらず、その威光は全く衰えていない。

天にまで届きそうな古城を眺めながら、彼の口から思わず感嘆のため息が漏れる。

「すげえ……」

両手に大きな荷物を持ち、道の真ん中で立ち尽くす。

何人かが鬱陶しげな視線を投げかけるが、彼にそんなものは一切届いていない。

神秘的なその城に彼の心は魅了されていた。いつまで見ていてもきつと見飽きない。

そんなふうには彼が思っていると、

「ねえ、アレス？」

自分の名を呼ぶわざとらしい甘ったるい声が、覚えのある香りと共にアレスの背後に現れた。

アレス。それがこの少年の名前だ。

「……………」

瞬間。

夢に浸っているような光悦とした彼の表情が一気に青冷めていく。同時に彼の口元が引きつる。

そして心の中で絶句。

この香りと、背後から感じる謎の威圧感。そして自分がこの町に来た理由。

誰がいるのかと考えるまでもない。

ギチギチと、まるで壊れた人形のように首を回す。

恐らくは後ろにいるであろう少女に何の洗礼をされるのか、そして自分は何をすれば少女の機嫌をいち早く直せるのか……焦る頭の中で思案しながら、アレスは唾を飲みこむ。

そして

「一発殴らせなさい？」

その可愛らしい声と共に、アレスの頬に鋭い激痛が走った。

ああ……殴られたんだ。

そうアレスが気づいたのは、彼女の声じゃない。

自分が盛大に地面に倒れ、視界に広がっているのが青空なのだと、理解した後だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8938z/>

哀れな羊たち

2011年12月28日01時56分発行